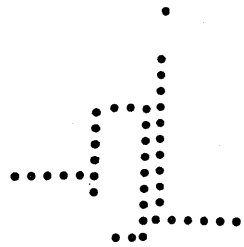


「私の幼児教育論」

真行寺 功



「私の幼児教育論」は「私の幼児教育」論とも、私の「幼児教育論」とも受け取れる。常識的には後者の意味であろうが、「私の幼児教育」を機会があれば振り返ってみたいと以前からおもっていたので、前半をそれに割かせていただくことにする。これは私の「幼児教育論」に密接に結びついているとおもわれるからである。

私は東京の亀戸天神の近くで生れ、小学校二年の終りまでそこで育った。小学校に入るまでの二年間、近くのミッション系の幼稚園「愛清館」で保育されたが、そこ

での出来事の数々は今でもかなり鮮やかに想起できる。もちろん園での生活の総てを記憶しているわけではなく、逸話的な出来事だけであるが、それらは幼児期の私にとって強烈な刺激であっただけでなく、そのときどきの私にとって極めて深い意味があったとおもわれる。この意味という点から考えると、それらは一幼児の私的体験の次元をこえて、幼児そのものの世界と心理を端的に物語る貴重な資料ともなりうる。

大きな積木で小屋をつくり、その中に入ったときの驚

きと興奮。叱られて、罰に薄暗い物置に押し込められ、叱られた原因も理由も忘れて、ただもう眼を大きく見開いて辺りを見まわした時の恐怖感。園舎のコンクリート壁と庭の芝生の間に蠢くさまざまな虫。丸くなったり、びよんと跳ねたり、お尻からなにやら煙りをはいて逃げたり、それはもう好奇心を満足させるのに十分な存在だった。椅子ごと後ろに倒れてスチームの放熱器に後頭部を打ちつけ、血だらけになった隣の子。その放熱器の上には弁当箱がならんでおかれてあった。それ以来、尖ったものを見るとゾッとするようになった。クリスマス劇やプレゼントも覚えている。また、他の子は「キングダーブック」を先生からもらって帰るのに、どうして自分にはもらえないのか、いつもその度に悲しく、淋しい気分になったものだ。

また、幼いながらに特別な感情を抱いていた、とても可愛い女兒がいた。髪がちぢれていて、昔の人氣子役のテンブルちゃんに似ていた。父親は外資系の石油会社に勤めていて、社宅に遊びにいくと、会社の構内には銀色

の大きな石油タンクが幾つもたっていて、とてもハイカラな雰囲気を感じられた。その子が突然ある日から姿を見せなくなった。父親の転勤で遠くへ行ってしまったとのことであった。そのことを知ったとき、その子がどこか遠く暗い闇の中へと消えていってしまったようで、とても淋しかった。

しかし幼稚園でもっとも印象深い出来事は園で怪我をしてひと月ほど入院したことだった。園の庭と通路を仕切る、高さ一メートルの金網のフェンスから跳びおりたとき、ふと脚を見ると、ふくらはぎの皮がめくられて肉が見えているではないか。出血も痛みもなかったが、これはただごとではないという不安から大声で泣きだした。友達が寄ってきて覗きこむ。やがて先生がやってきて、私を抱きかかえると職員室へ運び、傷口に油紙を当てて包帯を巻くと、先生はしっかりと私を抱いたまま、母が来るのを待った。

母が来ると三人でタクシーに乗った。途中まではいつも通る、見慣れた町の家並が車の窓越しに見えたが、家

へ曲る角を曲らずに通り返したとき、私は急に、これから何か恐ろしいことが起るような予感がして、不安になり、怯えたように「お家に帰ろう、お家はあっち！」と叫んだ。母はしきりに私を宥めて何かいっていったようだが、何をいったか覚えていない。家とは異なる方向へと私を引き裂く車。反対に町の家並は私の家の方へ飛んでいくではないか。

病院に着いてから手術まで、待合室で長く待たされたが、その間中ずっと母の膝を枕に長椅子に横になっていた。薄暗い待合室の絵が、他の患者すら、私にこれから何か仕掛けてくるようで恐ろしかった。それは手術のときに現実となった。数人の看護婦と母が私の手足を押えつけ、医者は私の細いふくらはぎの皮を引っ張って十二針も縫った。私は大暴れに暴れたが、到底はねのけて逃げることができない。私は何度も叫んだ。「死んじやうよう！ 医者のパカヤロ！」

母は「これが終わったらおもちやを買ってあげるから」と繰り返し、私を静かにさせようと努めた。責苦の中に

あってもそうした母の言葉は不思議とよく覚えていて、後で「あのときああいった」といっては母を困らせたように、退院する頃には、おもちやが幾つも枕元にあつた。

以上ははっきりと想起できる幼稚園時代の経験の一部であるが、幼児期の子どもは心理の特徴がよく現われていて興味がある。幼児の世界は狭く、自分の家から徐々にその世界は拡がり、いつでも危険が身に迫れば、その世界の要へ戻る様子が見てとれる。おとなは常に子どもを保護し守ってくれる者としてしか現われてこない。また幼稚園で先生から教えられたこと、説明や忠告、命令なども記憶にあまり残っていない。特に、これまでの発達心理学の研究からも明らかのように、概念的思考を必要とする事柄についての記憶は殆どない。しかし幼児期の経験を通して開発しないしは解放された何か（学習したとはいえない）が個人の生涯にわたって決定的な影響をあたえることはよく知られている。

例えば、太平洋戦争が激しくなった頃、中学生だった私は、ある人から疎開荷物の中から本を一冊あげるから、どれでも好きなものをとってよいといわれたが、手にしたのは注解付きの聖書だった。確かにミッション系の幼稚園でキリスト教に接したが、家族がキリスト者でもなく、教会に出入りしていたわけでもない。明確な意識をもってその本を選択したわけではなく、何故か理由もはっきりしない。戦争のもたらした苦痛から逃れるためだったのかもしれない。誇大に言えば、アウグスチヌスの「取りて読め」に似た経験であった。これを説明するに下意識とか潜在意識をもってすることも出来ようが、それは単なる心理学的分析をこえた問題のようにおもわれる。ここで私は何か概念的認識によらない、情緒的、欲求的認識による理解について考えざるをえない。

つまり概念や言語によらない認識についてである。しかもボディ・ランゲージなどのような、いわゆるノンバーバルなコミュニケーションによるものでもない。これは古くからいわれてきたことだが、現代では殆ど忘れられ

た問題である。つまり適合性 (connatuality) とか傾向性 (inclination)、親和性 (affinity) とよばれるものによる認識についてである。

中世の哲学者、トマス・アクィナスによると、感覚的欲求の働きと似た適合性という認識の手段が考えられる。これは理論的知的認識ではない。例えば倫理的問題について判断するとき、倫理学に詳しい者は学問的に正しい判断を下すだろうが、そうでない者はどのように判断するかといえば、適合性によるといわれる。よくいわれるように、「道徳」の成績のよい者が道徳的によいかといえば、必ずしもそうではなく、成績の悪い者が善い場合もある。このように学的認識によらずに判断を下す場合、それは判断の対象となっているものに対する適合性に基づくといわれる。しかもこれは情念としての愛として感覚的欲求の働きとされ、これによって知性は対象との情緒的一致を通してその対象の本質と接触し、それを捉えるのであって、概念によるのではない。したがってこの場合の知的認識の内容も直接的には概念的に表現

されない。このように理性による認識の一致が困難な対象についても完全な情緒的一致を媒介としてその本質の認識に到達することができる。この適合性による認識は決して価値が低いということではなく、むしろ人間学的には重要な意味をもつ。つまり宗教や形而上学的、美的認識、道徳的判断などにおいてはこの適合性による認識が主であるとさえいえる。また自然法の認識も適合性によるものだともいわれている。このようにして認識は理性による学的認識のみならず、また適合性によるものもあることを認めなければなるまい。現代では、理性的科学的認識のみが正しいものとされ、他は主観的として一切排除される。これと関連して次のことも知らなければならぬ。西欧の伝統的考え方として知的働きに大別して二つある。理性 (reason) と知性 (intellect) である。前者は概念操作によって比較考量する働きであり、後者は直観的全体的に認識する働きであるが、近世以後その区別に混乱が生じた。カントにおいても両者の働きが転倒し、理性 (Vernunft) と悟性 (Verstand) として認め

られているが、現代では、特に心理学においてはその区別はなくなり、知能という観点から捉えられている。そしていわゆる科学的認識を最高として、それへむけて教育することが主流となっている。しかも幼児期からそうした教育がなされているところに問題がある。月の世界にはもう兎はいない。駱駝にのった王子さまもお姫さまもない。そこは砂と岩石だけである。もはや太陽も昇ったり、沈んだりしない。地球が太陽の回りをまわっているだけにすぎない。こうした傾向は子供達をメタリックな無感覚に陥れるだけである。

ここで私は人間の知的働きについて再考を促し、その教育について考えることが必要だといいたい。では上述の適合性による認識を育てるにはどうすべきであろうか。それはまず、安定した家庭環境のなかで子供が安心していられる、保護された雰囲気が必要であり、そこを足掛りとしてできるだけ多種多様の経験をさせること、そしてなによりも想像力を豊かにすることが大切である

う。またこの想像力に基づいて直観力を開放することも重要であるが、これらはかならずしも概念や言語をもちいる必要はない。従って幼稚園での指導としては遊びなどではそうした想像力を育てる方向でプログラムをつくるべきだろう。たしかにそれほど意識的にしなくとも幼児はすでに想像の世界に住んでいるからそのままでもよいのではないか、とかんがえられるが、現在の幼児をとりまく世界はますます大人化し、事実以外のなものでもなくなっているので、やはり必要かとおもわれる。

また、自然の観察の際にも、ただ事実を忠実にみるだけでなく、たとえアニミスティックといわれても、共感や感情移入をどしどし取り入れるべきで、ぬいぐるみや人形劇などだけでなく、さらに砂や石といった無機物から身の回りの日用品、家具、さらには宏大な空、雲、星、月にいたるまで、総て見えるものも、見えないものも、ありとあらゆる在るもの (being) を擬人化し、自らも擬物化や擬動物化することが大切だとおもわれる。ある時は雲が怪物になり、ある時は自分が虫になったり、

箒になったりすることもよい。こうすることによって、つまりいろいろな在るもの (being) をある仕方を経験することによっていのちの優しさやこの世界で最も根源的な存在への感受性が育つのである。そしてこのいのちの優しさと存在への感受性とは人間存在の最も根源的な資質と考えられる。これによって平和を愛し、隣人に心を配り、謙虚に生きることができるのである。こうした優しきや感受性は想像力の発達する幼児期に芽生え、育つことを考えれば、そしてまたこれが概念的思考の基礎にもなるのであれば、保育目標の第一に挙げられるべきものとおもわれる。

J・マリタンも育成さるべき基本的性向の一つとして存在 (existence) についての単純な (simplicity) あるいは開放性 (openness) を指摘している。彼はこの性向を自ら存在することを喜び、存在することを恥としない、存在において毅然とたつ存在者の態度という。これはいわばはからのない無心な、総てにたいして開かれた態度といえよう。しかしこれはあくまでも目的であっ

て、容易に達しうるものではないが、少なくとも幼児期にその基礎が築かれるといえよう。こうした総てに開かれた態度は同時に総ての可能性にも開かれており、その意味で他者の在り方にたいしても深い理解をもち、その可能性の実現を希望するものである。

要するに、知的認識には理性的学的認識と情緒的欲求的認識とがあり、後者は前者におとらず事物の本質的認識が可能である。そして時間的には後者が先立ち、幼児期からの育成が望まれ、実際には想像力を十分に発達させることによって可能となる。またそれはとくに存在についての認識として、しかも人間学的な認識として前概念的・前言語的・幼児期より機能しているもので、後年になってから理性的学的認識が優勢になると、前意識的ないし下意識的なものとなるものであり、個人の生活の根底につよい影響を与えている。具体的にはそれは分離不安や危険、明暗、光と影、ものの生成消滅、死、その他の存在のもつ諸属性を経験することによって発達すると考えられる。従来は存在といえば形而上学や存在論にお

いて論じられる問題として専ら理性的学的に論じられてきた。最も抽象度が高いから理解が困難であるため、一般には敬遠されてきたが、それはむしろ時間的には後でも、本質的には先で、意識はされていないものの、すでにそれは機能しているとおもわれる。そうした認識能力の育成はまた知能障害児の理解と教育にとって重要な意味をもっているとおもわれる。

参考文献

- 稲垣良典：トーマス・アクイナスにおける適合性 (connaturalitas) による認識 「中世思想研究」 No. 1、中世哲学会、昭和33
- J・マリタン、溝上茂夫：人間教育論 創文社、昭和29 (Education at the Crossroad, 1943)
- (Pour une philosophie de l'education, 1959)
- (金沢大学)